



東北大学

令和6年度 一般選抜入学試験 個別学力試験
出題意図

(英語)

前期日程

大問 I

・ 出題意図

天文学に関する科学史に造詣が深い著者による、人間が天体をどのように認識してきたかを述べた文章からの出題でした。学術的な内容の文章に関して、文法の理解度、文章の流れを論理的に理解する能力、書かれている情報を正確かつ的確に把握する能力を問う問題でした。

・ 講評

問1 解答 (イ)(ク)

文法の理解度を測る問題でした。具体的には、英語学習者が間違えやすい to-不定詞を用いた構文および動詞の用法(自動詞・他動詞)を理解できているかを問う問題でした。正解の2つを選べたのは半数程度でした。(イ)の to-不定詞に関する選択肢を選べなかった答案が多数ありました。

問2 解答 ①(イ) ②(ア) ③(ウ)

文章の流れを正確に理解できるかを問う問題でした。具体的には、3つの段落の冒頭の1文、つまり学術的な文章ではその段落の内容を端的に示すトピック文を選ぶ問題でした。高い正答率でした。

問3 文章の流れを正確に把握し、従属節、「whatever + 名詞」構文、関係代名詞構文という文法事項を理解した上で、文意を的確に表現することができるかを問う問題でした。2つの指示語が指すものを文脈から把握することが求められていますので、単なる一つの文を訳すだけでなく文章の流れを踏まえた訳出が必要です。

heaven を「天国」と訳す、can を訳出していない、they と those が指すものを間違える、もしくは明らかにしていない答案が散見されました。

問4 段落の主題を正確に理解できているかを、指示語が指すものを答えさせることによって問う問題でした。「古代と現代の知識体系の違いは量的というよりも質的なものだ」という段落のトピック文を受けて話が展開されています。それを踏まえて指示語の内容を把握することが必要でした。該当部分にある not … but ～を not only … but also ～と誤解したり、不必要な情報を答えていたりしている答案が散見されました。

問5 解答 (ア)(オ)

問題の選択肢にある情報が文章のどこにあるかを素早く見つけ、その内容の正誤を正確に判断できるかを問う問題でした。高い正答率でした。

大問II

・出題意図

現在の米国の社会問題である社会格差に関する文章からの出題でした。学術的な内容の文章に関して、文法の理解度、文章の流れを論理的に理解する能力、書かれている情報を正確かつ的確に理解する能力を問う問題でした。

・講評

問1 解答 ① (イ) ② (ウ) ③ (ア)

文章の流れを正確に理解できるかを問う問題でした。具体的には、3つの段落の最後尾または冒頭の1文、つまり学術的な文章ではその段落の内容を端的に示すトピックや結論、もしくは次の段落への移行を表す文を選ぶ問題でした。

問2 大学卒業の資格が経済的に重要になっているという話の流れを踏まえて、比較と否定という文法事項を理解し文の意味を正確に述べることを問う問題でした。低い正答率でした。何と何とが比較されているのかを正確に理解できた答案は多くありませんでした。

問3 economic と mobility という2つの語の意味がわかり、それが文脈でどのようなことを指すのか理解できているかを問う問題でした。アメリカの経済状況について述べた答案が散見されました。

問4 解答 2番目 (イ) 4番目 (ア)

文脈を踏まえどのような意味の文が該当箇所に来るのかを把握し、その意味を表す

文を選択肢を使って表現することができるかを問う問題でした。whether があることから従属節があることに気づき、2つの節の動詞を正確に選ぶことができるかがポイントでした。

問5 分詞構文や関係代名詞節という文法事項、および of one's own -ing、fail to、live up to という熟語を理解し、その上で文意を正確に表現することができるかを問う問題でした。文脈の理解が訳出を助けてくれたはずです。

高い正答率でした。その中で目立った誤答は、of one's own -ing を「お金を稼いでいない」、live up to を「～まで生活する」、where they are を「彼らがどこにいるか、どこにいるにせよ」などとしたものでした。

問6 解答 (ウ)

文章全体の大意を把握し、それに適合するタイトルを選ぶ問題でした。文章全体を素早く読み、主旨を理解できるかを問う問題でした。

大問Ⅲ

・出題意図

授業における教員と学生の会話を題材に、学術場面での口語的な表現（句動詞、熟語など）を理解できているか、および会話のトピックに関して自分の考えを的確に表現することができるかを問う問題でした。

・講評

1) 解答 ① (B) ② (A) ③ (C) ④ (D) ⑤ (B)

学術的な会話文の話の流れを踏まえて、的確な句動詞、熟語、接続表現を選ぶことができるかを問う問題でした。①と⑤は高い正答率でしたが、④は低い正答率でした。

①「母語話者だけならば中国語が最も話者の多い言語だが、母語話者以外の話者を～すると英語が一番多い」という話の流れですので、「考慮する」という意味を表す take into consideration が適切です。

②「世界に日本語話者はどれくらいいると思うか」「日本の人口は1億2千5百万だから、～それくらいにちがいない」という話の流れで、選択肢の中で当てはまるのは「少なくとも」の at least です。その後の Miller 教授の発言で1億3千万くらいという数字が出ていることにも注意することが必要です。

③「外国で日本語を学習している人が4百万弱、外国在住の日系人が同じくらい、～国外在住の日本国籍の人が100万人ちょっと」と述べているので、空所に相応しいのは「さらに」です。

④「近年日本語を学習する人の数は増えているが、まだ他の主要な言語と同じくらい人気がある」という話の流れです。否定を含む表現が来ることが推測できます。該当する(B)、(C)、(D)の中から空所直後の as popular as other major languages に適合する表現を選ぶ必要があります。

⑤「米国でも多くの人々がアニメやゲームのようなサブカルチャーを通して日本語...」という話の流れです。「～を学習し始める、～に入っていく」などの意味が適切です。選択肢の中でその意味を持つのは get into です。

2) 会話文を理解した上で、そこでのトピックについて自分の考えを正しく、的確に英語で表現し、自分の意見を支持する説明が十分に書けるかどうかを見る問題でした。よく書けている答案が多かったですが、接続表現にもう一工夫する必要がある答案、白紙答案も若干数ありました。

大問IV

・出題意図

「科学」に関する文章を題材として、作文に必要な文法・構文の知識、英語の表現力を見る問題でした。特に、英語表現力については、与えられた日本文の意味を理解した上で、必要に応じて解釈を加えつつ、自分の語彙を用いて適切に英語で表現できるかを見る問題でした。

・講評

問1 解答 ①(カ) ②(ウ) ③(ア)

下線部の日本語と問題に与えられた英語を対照すると、「その発展を支えたのは、緊密な結びつきだった」の部分を選択肢を並べ替えて作文すればいいことに気づきます。what supported its development、the close connection という表現に気づくことができるかどうかポイントです。

低い正答率でした。形容詞 close を選ぶべきところを副詞 tightly と答えた答案が多くありました。

問2 解答 ①(イ) ②(エ) ③(ク)

下線部の日本語と問題に与えられた英語を対照すると、「～するために、...より...の方がはるかに大切である」の部分を選択肢を並べ替えて作文すればいいことに気づきます。is far more important than という比較表現、in order to という目的を表す表現に気づくことができるかどうかポイントです。正答率は高かったです。

問3 「～という確信、あるいは信念」という同格表現、「～して初めて」という接続表現、そして「ひるむことなく」の訳出がポイントでした。学術場面で使われやすい語彙や構文を的確に表現できるかを見る問題でした。

正答率は低かったです。「問題に～向かっていける」を正しく訳出できた答案、接続表現を的確に表現できた答案が少なかったです。

後期日程

大問 I

・ 出題意図

生活上の時間感覚・テンポに関する社会心理学的研究に造詣が深い著者が場所により時間感覚がどのように異なるかを述べた文章からの出題でした。学術的な内容の文章に関して、段落の内容を理解する能力、文法の理解度、書かれている情報を正確かつ的確に把握する能力を問う問題でした。

・ 講評

問 1 解答 (エ)

段落の主旨を理解できているかを問う問題でした。段落で述べられていること（トピック）を踏まえ、空所に入る形容詞を選ぶ問題でした。高い正答率でした。

問 2 解答 (エ)(ク)

文法の理解度を測る問題でした。具体的には、英語学習者が間違いやすい to-不定詞が名詞を修飾する構文および動詞と後続する名詞の間の一致を理解できているかを問う問題でした。正答率は高くありませんでした。隣接していない名詞と動詞の一致に気づかない答案が少なくなかったです。

問 3 文章中の情報を正確に把握し、それを的確に表現することができるかを問う問題でした。該当箇所を見つけるのは難しくありませんが、そこに書かれている情報を的確に表現することが必要です。低い正答率でした。本文の該当部分をだらだらと訳しただけの答案や蛇足的な情報を答えている答案がありました。

問 4 文章中の情報を正確に把握し、それを的確に表現することができるかを問う問題でした。該当箇所を見つけるのは難しくありませんが、2つの段落にまたがる内容を的確かつ簡潔に表現することが必要です。問題の指示を誤解し著者の経験を答えた答案が少なからずありました。

問 5 解答 (ア)(オ)

問題の選択肢にある情報が文章のどこにあるかを素早く見つけ、その内容の正誤を正確に判断できるかを問う問題でした。高い正答率でした。

大問Ⅱ

・出題意図

現在の国際問題である環境保護における先住民の果たす役割の重要性を論じた文章からの出題でした。時事的な話題を扱う文章に関して、文章の内容や話の展開を論理的かつ的確に理解する能力、書かれている情報を正確かつ的確に表現する能力を問う問題でした。

・講評

問1 文章の流れを正確に把握できるかを問う問題でした。下線部直前の代名詞 that が何を指すかを理解した上で、前後の文脈を理解できているかを見る問題でした。正答率はあまり高くありませんでした。that が指すものを正確に理解できていた答えは多くなかったです。

問2 学術的な文章では珍しくない、従属節の中にさらに複数の節があるという複雑な構造を持つ英文が正確に理解できるかを見る問題でした。名詞同格節や there is 構文という文法事項、および not only ... but ~や現代社会で頻出する語句(biodiversity、food security など) の理解が必要です。高い正答率でした。

問3 代名詞 this の指す内容を答える問題でした。複数の段落にまたがる話の展開が理解できているかを見る問題でした。正答率はあまり高くありませんでした。正答を答えた答案と全く的外れな答えをした答案が比較的はっきり分かれました。

問4 代名詞や動詞句の省略を含む文が正確に理解できるかを問う問題でした。文章末部の話の展開が理解できるかどうかポイントです。低い正答率でした。It が指す内容を具体的に答えていなかったり、全く的外れの解答をした答案が少なからずありました。

問5 解答 (ウ)(オ)

問題の選択肢にある情報が文章のどこにあるかを素早く見つけ、その内容の正誤を正確に判断できるかを問う問題でした。低い正答率でした。

大問Ⅲ

・ 出題意図

異文化間コミュニケーションに関する文章を題材として、作文に必要な文法・構文の知識、英語の表現力を見る問題でした。特に、英語表現力については、与えられた日本文の意味を理解した上で、必要に応じて解釈を加えつつ、自分の語彙を用いて適切に英語で表現できるか、問われているトピックについて明確かつ論理的に表現できるかを見る問題でした。

・ 講評

問1 解答 ① (エ) ② (キ) ③ (ケ)

下線部の日本語と問題に与えられた英語を対照すると、「コミュニケーションを図る(ために)」、「どのチャンネルに合っているかを... (見つけ) 出す」の部分を選択肢を並べ替えて作文すればいいことに気づきます。日本語の「相手」が their で表現されているのでそれが指す名詞が前半部分になければならないことに気づくことができるかどうかポイントでした。正答率はあまり高くありませんでした。後半部分の find の後に out が来ることに気づかなかったものと思われます。

問2 日本語原文では省略されている主語を補って英語らしく表現できるかを見る問題でした。「深く相手を考える」、「なんとなく」の訳出がポイントでした。

正答率はあまり高くありませんでした。上記のポイントは比較的できていたのですが、「なぜなら」の訳出として Because で始めて主節部分がない答案が散見されました。Why ...? という疑問文への省略的な回答として Because ... とする場合があるので、それを誤って拡大解釈したものと推測されます。また、「同じ文化」の訳出に same culture のように冠詞をつけない答案も少なくありませんでした。

問3 与えられた指示に対して自分の考えを正しく、的確に英語で表現できるかどうかを見る問題でした。冠詞や文脈に合った名詞の形に関して減点された答案が散見されました。

○志願者へのメッセージ

研究大学に位置づけられている東北大学では、国際的な研究成果を多数生み出し、先端的研究と教育を一体的に進めていくことを、その教育理念に掲げています。そのベースを支えるスキルのひとつに、学術的な英語、つまり、アカデミック・イングリッシュの運用能力があり、本学の全学教育（学部1～2年生が履修する教養課程の授業）では、アカデミック・イングリッシュの基礎を学びます。そこで、本学を志願する皆さんには、その準備として、英文テキストを分析的、批判的に読み、そこに述べられている内容を正確に理解しようとする姿勢、また、文法的に正確だけでなく、論理的にも一貫性のある英文を書こうとする姿勢を大切にしてほしいと思います。

近年の本学の長文問題は分量が比較的長めのものになっています。内容はそれほど専門的ではありませんが、ある程度抽象度の高い文章なので、問題文全体の構造を正確に把握する必要があります。また、下線部を和訳する問題よりも、下線部の内容に関連した説明の問題が多くなってきています。そのためには、設問に合わせて問題文から必要な情報を取り出し、過不足なく適切な日本語で表現する能力が必要となります。高度な英語読解力を身につけるためには、一定量の英文を読み、全体の内容を短時間でつかむという訓練をできるだけ多く行うと同時に、正確な文法的知識と豊富な語彙力に支えられた正確な読解を行う訓練も必要です。問題を正確に把握し、解答するためには、現代的な話題についての英文を読んだり、それを基に自分の考えを英語で述べたりするといった訓練を日頃から行うことが大切です。

英語のライティング、特に自由英作文では、短文を並列するだけで論理関係が不明瞭なものや論理的につながらない答案が見受けられました。自分の書いた文章を読み直して、論理的に筋が通っているか、自分の意図した内容を表しているかを点検することが大切です。母語でもそうですが、「書く」ことは訓練が必要です。まして、外国語ともなれば、正確に書く能力を身につけることは大変な努力が必要です。「文法なんか気にしないで勇気を出して話してごらん」とは言っても、それと同じことは、書くことには通用しません。書くことはごまかしが利きませんから、英語で言えば、前置詞や冠詞など、話しことばでは、さほど注意しなくてもよいことにも気を配って、しっかりとした英文が書けるように努力をしてほしいと思います。

最後に、答案を丁寧に書く、誤字脱字をしない（英語であればスペリングミスをしない）などの基本的な点にも注意を向けてほしいと思います。また、小さい字、薄い字、乱雑な字、判別しづらい字で書かれた答案は採点者にとって読みにくいだけでなく、結果として受験者本人が損をする結果になりかねません。手書き文字がうまいか下手かといったことではなく、できるだけ丁寧に書くということが、答案を読む相手のみならず、自分のためにもなるということを忘れないでください。